

古代道路 東山道武蔵路

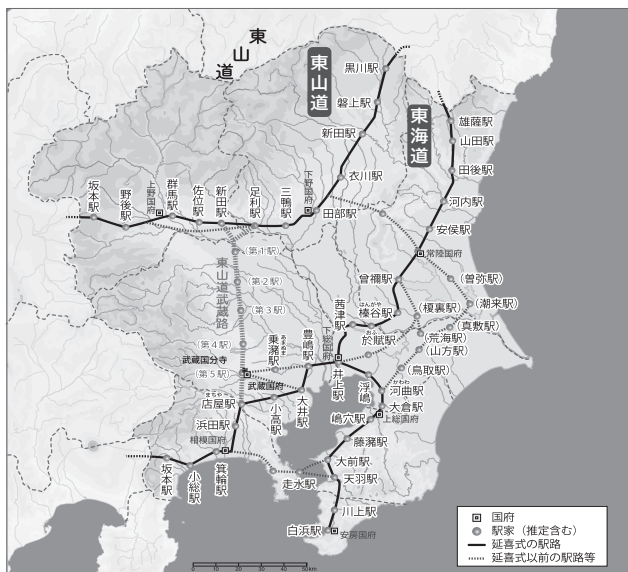
律令国家の形成と五畿七道

乙巳の変（645年）後、我が国では律（刑法）と令（行政法、民法）を統治の基本法とする中央集権的な国家が成立し、国の支配体制を全国に及ぼすために、7世紀後半から8世紀前半にかけて、都のある五畿（畿内5か国）と、諸国の国府を結ぶ放射線状に伸びる七道（図）が整備されました。七道は古代官道の名であると同時に、諸国はいずれかの道に属するため、地方の行政区画ともなっています。

武蔵国は、はじめは東山道に配属されましたが、上野国と下野国を通る東山道の本路からは南へ大きく外れた位置にあります。そのため、上野国の新田駅付近から武蔵国府に南下する支路が存在したことが、平安時代に編さんされた『続日本紀』に記されており、この道を現在では東山道武蔵路と呼称しています。

天平13年（741）の国分寺建立の詔により造営が開始された武蔵国分寺の主要な建物が完成してから十数年後の宝亀2年（771）に、東山道武蔵路を往復することは交通上不便であるという理由から、武蔵国は東海道へ所属替えとなります。これにより東山道武蔵路は公的な官道としての役割を終えますが、これまでの

発掘調査により、武蔵国分寺周辺の道路は、国府・国分寺へ至る主要な道路として寺院の運営と密接に関わりながら、補修や再整備などの維持管理が行われ、平安時代の終わりまで使用されていたことが分かっています。



武蔵国周辺の古代道路（推定）

- 駅路の名は10世紀成立の『延喜式』による
- 武蔵国は宝亀2年（771）まで東山道に所属
- 道の等級
- 〈大路〉 山陽道
- 〈中路〉 東山道・東海道
- 〈小路〉 北陸道・山陰道・南海道・西海道

— 主要官道（駅路）

■ 国府

0 100km



五畿七道

『古代道路を掘る - 東山道武蔵路
の調査成果と保存活用 - 』をもとに作成

泉町地区の東山道武蔵路

平成7年に行われた泉町二丁目の旧鉄道学園跡地再開発事業に伴う発掘調査では、東西両側に側溝を有する幅員約12mの直線道路が、南北約340mにわたって発見されました。この道は、7世紀第3四半期から11世紀まで機能していたと考えられ、4期の変遷を経ることも明らかになりました。当時、全国的にも古代の官道がこれほどの規模で発見されるのは稀で、研究者や一般の方々の大きな関心をよび、再開発の計画を変更して遺構を地下に保存することになりました。

東山道武蔵路の遺構



遺構再生展示施設（レプリカ）

泉町地区の北端で、恋ヶ窪谷へ向かって台地縁を掘削した切り通し状の道路構造が確認されています。現地に、遺構の様子を展示する施設があります。



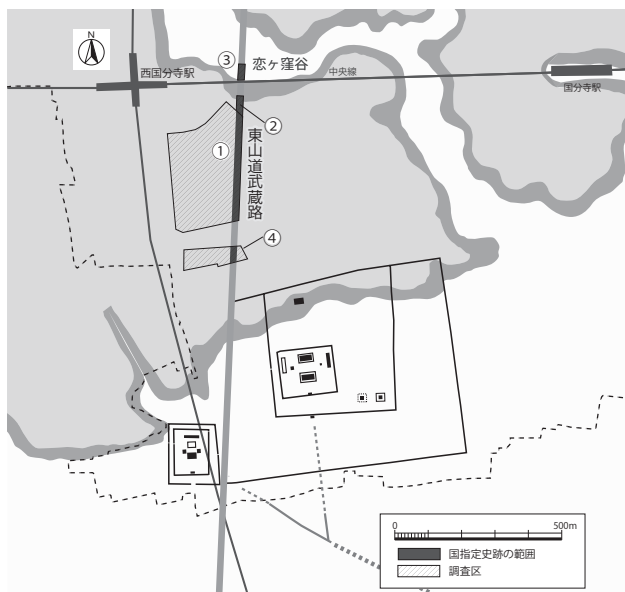
敷粗朶と版築の状況

恋ヶ窪谷の低地では、湿地帯に道路を敷設するために、敷粗朶工法とよばれる土木技術が用いられていたことが確認されています。遺構は地下に保存され、姿見の池の散策路に解説板が設置されています。



発見された東山道武蔵路（上が北）

平成12年に整備が行われ、平成22年に東山道武蔵路の一部は、武蔵国分寺跡の附として国の史跡に追加指定されました。



調査区と国指定史跡の範囲



市立歴史公園「史跡東山道武蔵路（武蔵国分寺跡北方地区）」西元町地区（旧第四小学校跡地）では、道路の3期の変遷が確認されています。また道路に関する祭祀が行われたと想定される特殊遺構、竪穴建物跡なども見付き、平成23年に整備が行われました。